

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ②T-Hawk



「グレートしようぜ!」という フレームだけだったらいららない

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第2弾は、T-Hawkが登場。1回戦の対戦相手である田村ハヤトは現在のタッグパートナーであり、同じくトーナメントと前後して凱旋興行をおこなう身。そんな中、T-Hawkの口から出たのは「グレートしようぜ!って何?」という問題提起だった。(聞き手・鈴木健.txt)



田村ハヤトとはミニマリスト同士の プロレスを第1試合でやりたい

——T-Hawk選手は昨年に続いての「G-CLASS」エントリーとなります。

T-Hawk 前回の16選手エントリーから8人になったことで雑味がないというか、よりピュアな今のGLEATのトップ8人がエントリーされたトーナメントであることが、僕の中では大きいです。前回、僕は愛鷹亮さんに準決勝で負けたんですけど、愛鷹さんっていったら年齢は上にしても、プロレスキャリアに関してはその時点でペーペーだったじゃないですか。それで、なんとかしてあげようという謎の親心のようなものが出ちゃったんです。それに対し今回はよりならされたというか、フラットに臨めるトーナメントという意味で楽しみにしています。

——厳選という点では伊藤貴則、渡辺壮馬、井土徹也だけでなく田中稔、鈴木鼓太郎という実績十分な選手でさえエントリーされなかったですからね。

T-Hawk 来年はもしかすると僕が入れないかもしれない。去年は第1回目だったから、そういう危機感のようなものはなかったんですけど、まだ歴史がないこともあって単発で終わった印象だったんです。あそこで生み出されたもの



があとに続かなかった。

——優勝した中嶋勝彦選手が直後にG-REX王者になるという流れこそあったものの、トーナメント自体はその過程という見方で終わってしまったかもしれません。

T-Hawk 僕、最近ね、Netflixに入ったんですよ。

——今ですか!?

T-Hawk 流行りものには手を出さないという逆張り精神があったんです。でも、見てみたらNetflixのプログラムって続きが見たくなるように、45~50分で作られているんですよ。そういうNetflix感がウチにもほしいと思っていて、あとは民放では表現できない危うさもあるじゃないですか。それをGLEATではできるんじゃないかって、見ながら思ったんですよ。2026年に関することというよりも、その先…Seasonが続くような感覚で見られるようにしていきたい。だからトーナメントで誰々が優勝しました、めでたしめでたしで終わらせちゃいけないんです。

——その1回戦の相手が、田村ハヤト選手です。

T-Hawk “高校野球の名門対決”っていう括りが落ち着くんでしょうけど、それ以上に僕も田村くんも小賢しいことはなしでいくタイプだから、彼ならタックル、ラリアット、僕なら張り手、チョップというようにミニマリストのように表現できる唯一の二人だと思うんです。技を制限して、絞って絞って、より真正面からぶつかり合うプロレスを最大に突きつめた形でやれるのが僕ら二人。そういうプロレスを、第1試合で見せたい。先にあげた4つの技しかほぼ出ないけど、ザッツ・プロレスというのを感じさせる…スタイリッシュとか疾走感といったベースをフル無視してやりたい。それをド頭で見せた時に、どんな空気になるのか感じてみたいんですよ。

——本当に第1試合に組まれたら、まさにつかみはOK的なものになるでしょう。

T-Hawk 過去に3度シングルでやっていますが、あの時の田村くんとは

別人だと思っていて。今はアメ車なのに小回りが効く感じ。遺伝子からして違うような。

——そんなに違うんですか。

T-Hawk 長期欠場から帰ってきた時に、すごくクリアになった印象を持ったんです。前はラテだったのが、アクエリアスのような清涼飲料感がある。混ぜ物はいらぬ状態になっているから、前とは違うアプローチに僕もなると思います。よく、組んでいる人間と闘うのはどうなのって言われますけど正直、組んでも1対1で向き合っていますから。彼も前に出たがるじゃないですか。僕も出たがりだから、明らかに組みながら闘っているんですよ。存在感で負けまいぞって火の粉が隣からかかってくる。

——逆に、なぜ今は組んでいるのでしょうか。

T-Hawk もちろんGLEAT全員でっていうのはありつつも、僕は内にしろ外にしろ蹴落としたいタイプなんで、それを組むことによって感じさせるのが田村ハヤトなんです。変にタッグチームとしてまとめようとしなないし、でも熱量は伝わってくる。GLEATも、去年のことは今となってはもうどうでもいいんですけど、変にまとめようとしている感じがある。それに対し、そうじゃないだろって思う自分がいるんですよ。主張してナンボだし、自分の意見を言ってナンボ…そもそも「グレイトしようぜ！」って何？って思っています。それはこのタイミングだからこそ思うことで、歴史がまだ浅いからこそブチ壊せるんですよ。フレームだけ作っちゃって、あとから中身を作るよりも、一回その枠を壊して復興した方が、みんなと一緒にできる気がするんですよ。それには全員が一人で闘うトーナメントをきっかけにするのがいいタイミングなのかなと。

——「グレイトしようぜ」のスローガンを掲げながら、その枠ばかりにとらわれて中が見えて来ていないということですか。

T-Hawk そう、だからフレームなんていらんですよ。俺、あまりやったことないですから。しゃあなしにやることはあっても。

——しゃあなしに。

T-Hawk 「これってどうなの？」と疑問に思うのって大事だと思うから。でも逆に田村ハヤトって、何も考えていないのがいいところで、変にこねくり回すとそれは違うと思うんですよ。

——放し飼いにしておいた方がいいと。

T-Hawk そう、放し飼いですよ。リード・フル無視の放牧状態。

——お二人のチームって、まだ正式名が決まっていないうんですよ。そのつど暫定的な呼び方はつけていますが。

T-Hawk これも絞りたくないんですよ。ジャズのセッションのように、バンドスコアもいらぬ。だから今後もチーム名はつけるつもりないです。

——譜面なしでやった結果、よく誤爆しますが。

T-Hawk あれはあれでいいんです、池乃めだか師匠のようなもので。僕はちゃんと相手を狙っているんですけど、めだか師匠が出てきてしまう。

——どうしてめだか師匠が出てきてしまうのか。

T-Hawk ここに来たらこれが見られるっていうのも大事じゃないですか。かといって、お客さんが求めているものに寄り添いすぎるのもダメなんですけど。

——明らかに観客は求めています。

T-Hawk ……求めてますね。そこはお客さんとのセッションです。音を合わせすぎず、かつ息は合っているような。

——あれほど誤爆しながら仲間割れしないのもすごいと思うんです。

T-Hawk だって、明らかにあいつもほしがっているじゃないですか。お客さんもほしがり、田村もほしがると僕の中の悪魔が出てきて、今日はやらんってなることもある。それもまた、闘いなんですよ。全方位と闘っている。僕はキャッチャーをやっていたからインコースを投げさせるだけじゃなく外角も高

さも奥行きもつけなきゃいいリードはできないという考えなんで、そこは散らしていきます。

——これは田村選手にも聞いたんですけど、二人でポーズをとる時になぜかキャッチャー出身のT-Hawk選手がバッティングポーズをとって、キャッチングスタイルを田村選手にやらせていますよね。

T-Hawk それは僕が先輩だからです。

——ここに来て縦社会を持ち出す！

T-Hawk そこも鬪いですよ。田村はバッターをやりたいがったんです。それで僕が「おまえ、後輩やる」って。そこも田村はわかっているんですよ。今の時代って上下関係の文化が疎まれて、運動会の徒競走でも手をつないで一緒にゴールしましょう的なものがあるじゃないですか。

——格差をつけると文句が出るという。

T-Hawk そんなもん、知らんって。僕も田村もゴリゴリの上下関係文化で育ってきて、受け身がとれるんですよ。田村は、後輩の受け身。ああいうのは大事ですよ。縦社会における受け身のとり方って、一般社会に出ても身についている人間は有能じゃないですか。プロレス以外でも大事だと思いますよ。だから先輩がバッターなのは当然であり、そこは僕も譲れないものがある。



100%面白くなるって、裏を返せばつまらないんですよ

——じゃあ、ずっとあのままですね。自分と田村選手以外のマークする選手は誰になりますか。

T-Hawk めちゃくちゃベタでやってみたいのはKAZMAと石田です。特にKAZMAとはシングルでやったことがないのもあるし、打ったら返ってくるタイプだから好きだし、そういう単純なやり合いをやってみたい。石田に関してはよくも悪くも鬪う上で一番手が合う。あとはチャンピオンのリングマンともやっておきたいし。この前(4・8新宿)やってみて、やっぱり楽しかったのもあるんですけど、今のリングマンを見ているとチャンピオンとして団体を守るとか引っ張っていく責任感が先走っちゃって、なんていうか…ベルトに旅をさせてあげていない気がするんです。

——ベルトに旅をさせる？

T-Hawk たとえばですけど、今は休んでいる三宅豪に対し復帰戦でタイト

ルマッチをやるぞっていうぐらいのことをやってもいいと思うんですよね。ただ防衛回数を重ねるだけだと、インコースまっすぐだけのリードになってしまう。チャンピオンが球を散らしたら、その方が面白いじゃないですか。

——別ブロックはその3人と山村武寛選手です。

T-Hawk 反対ブロックって全員間違いないというか、期待値を超えてくる4人なんですよね。ただ、それが「おいおいおいおい!？」ってなるかといったら違う。100%面白くなるって、裏を返せばつまらないんですよね。

——どうなっちゃうんだ!？と、想像を膨らませることができるかどうかということですか。

T-Hawk そうです。でも、こっちのブロックは田村ハヤト、河上隆一、ブラスナックルJUNとわざわざしませんか？ 外資系銀行マンと居酒屋系に分かれている。居酒屋系は赤ちょうちんをくぐったら意外と旨い串焼きに出逢うかもしれないけど、あっちのブロックは入る前から確実に旨い。食べログの評価も高い。僕らの方は1と5に評価が集中して、会計が合っているかどうかも怪しい店。外資系の中から勝ち上がってくるのは…リンダマンだと思うけど、個人的オッズはKAZMAで。

——KAZMA選手は願望の強さで？

T-Hawk あの人って、わざと引っ込んでいる気がするんですよ。それをして、俺はシングルが嫌いとか苦手とかそういう言葉を使うけど、そこを楽しくさせてあげたいし、シングルで火を点けるとしたら僕が一番得意なんで。皆さんにお聞きしたいんですけど、俺とシングルマッチでやった人間って、みんないつもと違う感じがしません？

——言われてみれば。

T-Hawk ケツを叩くのが、昔から得意だと自分では思っています。団体のエースとは違うかもしれないけど、その役割は僕しかできないと思う。パン！と張ってみたい。

——張り手をもらって我を忘れてエキサイトするKAZMA選手は、確かに見たイメージがないです。ただ、これほど長い付き合いの中で、やはり今でもエル・リンダマンは闘いたい相手なんですね。

T-Hawk そこは今だからこそより純度が高いと思うんです。お互いが三十代に入って、より生々しいプロレスができる気がして。

——ところで、今の河上隆一選手はどのように映っているんですか。

T-Hawk あれはサーティワンです。ワクワクさせて終わり。この前、河上さ



んのSNSを見たらかわいいサンドイッチの画像が上げられていたんですよ。それで僕も、かわいいものを食べたらあいつの気持ちがわかるんじゃないかと思って、かわいいっていえばなんだろうと考えた結果、サーティワンにいったんですよ、普段はアイス食べないのに。それで“かわいい”というの必要なんだという結論に至りました。ウチってビターな人が多いじゃないですか。その中にサーティワンのような…あの人、シュークリームがどうのって言っていたんですよ？

——はい、公式インタビューの中で「シュークリームのようなプロレスラーになりたい」と夢を語っていました。

T-Hawk 真壁(刀義)さんとはまた違ったスイーツレスラーの形ですよ。サーティワンの看板ってポップですよ。河上隆一もポップな看板でいい。中身は俺に任せてもらって、看板を全うしてください。

——T-Hawk選手は比較的すんなりと受け入れていますよね。伊藤貴則選手はいまだに憤っています。

T-Hawk 実は、リーダー(河上)と飲んだんですよ。それで腹を割って話してみたら、意外と熱いんです。サーティワンがあると思ってモールに入ったら、ゴリゴリのステーキハウスが並んでいたような感じで、けっこう男らしいことを言うんです。自分の持論もちゃんと持っているし。でも入り口はポップじゃないですか。あれはズルいよ。入り口がカラフルなのに、引き込んだらしっかりしたモノを出してくる。歯応えのあるウェルダンでも旨かったら、みんな持っていられるでしょ。

——伊藤選手は、その言葉巧みなところが逆に信用できないそうなんです。だから「みんな、いったいどうしちゃったんだよ!」となっているようで…。

T-Hawk そこは僕の場合、逆によくもあんな七変化できるなと感心してしまうんで。大日本プロレス時代にシングルマッチでやったことがあったんですけど、今と全然違いますよね。

——では、信用しているんですね。

T-Hawk (小声で)信用はしていません。まったくしてない。でも、勝手に面白がっている。

——面白がる対象だと。

T-Hawk 変な話、今一番数字が取れるのって林執行役員かブラスナックルJUNか河上なんですよ。その字ヅラだけでも面白くないですか。

——確かに河上選手とブラスナックル選手の公式インタビューは、SNS上の反響が凄まじかったです。

T-Hawk あれは僕も面白がれました。

——まあ、面白がる距離感が一番いいのかもしれません。

T-Hawk 僕は一番熱いけど、一番ドライもあるんです。だから面白がれるし、でも今ならJUNとやりたいと思うという。ようやくここに来てブラスナックルの自我が出始めている。昔やっていた、ナントカセコンド…なんて言いましたっけ？

——60secondsです。選手の皆さん、みんな憶えていないんですよ。

T-Hawk なんかモテなさそうな大学のサークル名なんて、本人たちでさえ憶えていないでしょう。あの時は、やらされているなあって思っていたんですけど、今は自分がこうやりたいからこうするっていうのが見える。それって大事なことですから。

——凶器攻撃や乱入というやり方に関しては？

T-Hawk 全然いいですよ、ブラスナックルでもなんでも使いなさい。そこじゃないと思っているから。まあ内々ではあるけど、支持はされているじゃないですか。あとはWWEの選手(ジュリア)に噛みついたり、外側にも意識が向いたりしてきた。そういうところは、ちゃんと見ないとね。だから準決勝はブラスナックルJUNがいいですけど、今回のトーナメントはまず、田村ハヤトですよ。

乱発したくない凱旋興行を今年もやる理由…テーマは“つなぐ”

——トーナメントに関してはわかりました。6・4新宿のG-CLASS決勝戦の3日後には、昨年続く地元・苫小牧(アブロス矢代スポーツセンター)での凱旋興行があります。

T-Hawk 実は今回、やるつもりはなかったんです。前回はすごく大変だったから。去年は15周年ってキリがよかったのもあったので、次は20周年でやりたかったんです。それぐらい乱発したくなかった。でも、前回終わったあとに初めてプロレスを見に来た人が100人近くいたんですけど「プロレスってメチャクチャ面白いですね！ 次も絶対に来ます」って、直接言ってくれたんですよ。僕はGLEATが面白かったよりもプロレスが面白かったと言われたことがすごく嬉しかったんです。小学5年生の時にプロレスを初めて見て、その時にプロレスラーがカッコいいと思ったから今もこの仕事を続けていられる。自分でやっ
ていながら、同業のプロレスラーを見てカッコいいと今も思えるし、自分もカッコよく生きないといけないなって思わせてくれる。それと同じ感情を持ってくれたからこそ、面白い、楽しい、カッコいいという言葉をもたらえたのが嬉しかったんですよ。それで、勢いのまま今回もやることにしたんです。だから6月7日は、また言ってもらいたい。理想はそれがGLEATを見てであればベストだけど、ほかの団体でもいいんです。そういうふうに通ってもらえるプロレスラーの人たちがいた方がいいじゃないですか。

——苫小牧市にやってくる団体も今では限られるでしょうから、生で観戦できるのは年に1、2回です。





T-Hawk 馴染みがない分、大変だし今の時点ですごいプレッシャーなんですよ。でも、大会が終わったあとにそういう声をいただけたら全部チャラになるというか。仮に赤字になっても心は黒字みたいなね。地元だから言うわけじゃないけど、去年で一番嬉しかったかもしれない。そうだ、あの時にGLEATの選手からも「よかったですね」って言われて嬉しかったんだ。それも含めてやってよかったって思えた。もちろん、会社のバックアップありきの話なんですけど、地元でやる意味っていうのは、もはやそこしかないですよ。故郷に帰ってきて、今も元気でやっていますっていうのを見せるのもあるけど…僕はキャリア11年目ぐらいまで、周りのおかげじゃなく自分の努力でやってきたんだって思っていた野郎なんです。性格的に突っ張っていた部分もあったと思うんですけど、この数年でそれって全然違うだろって気づけた。周りの方々が協力し、立ててくれて、その上でその人たちが喜んでくれたら倍嬉しくなるっていうのを経験するようになった。それもあって、今年もやろうと自分になったんでしょね。

——今は試合の傍ら、地元に戻って営業回りを？

T-Hawk はい、僕のやり方はアナログで一軒一軒ポスターを持って回るんです。東京大会や大阪大会でも、来ていただいた知り合いの方にはLINEじゃなく直接お礼を言いに行きます。前にいた団体の社長さんに教えてもらったのが「人は熱量じゃないと動かないから」だったし、それこそ野球部精神じゃないけど直接、ありがとうございますと伝えなさいという教えが(駒大苫小牧野球部の)監督からもあったし。僕はそういう指導していただいた方には恵まれていたんだと思います。だからポスターを持って一軒ずつ回るのは嫌いじゃない。ぶっちゃけ、プロレスを知らない人がほとんどですよ。でも、ポスターを貼ってください、そしてもしよかったら大会も見に来てくださいって言うことで、つながっていく。僕の個人的な2026年のテーマは“つなぐ”なんで。

——野球部の皆さんは応援に駆けつけるんですか。

T-Hawk それがね、シーズン直前なんですよ。

——ああ、南北海道予選が始まるのは6月20日ぐらいですもんね。

T-Hawk 前は5月だったので監督、コーチ、OBがいくって言ってくれて。誰とは言わないですけど、甲子園優勝メンバーも何人か来てくれたんです。体

育会系ならではの「後輩のためなら」っていうので。でも今年は6月だから、夏の甲子園に向けて追い込み期間なんですよ。

——田村選手は4月29日開催なので、前橋育英高校野球部が総出で応援に来るそうです。

T-Hawk それは時期がよかったですよね。でも、今のプロレス界で地元凱旋興行ができるって、恵まれていると思うんですよ。今回、田村さんと山村もやるじゃないですか。僕の場合は利益を考えたら席数も多くないからそんなには出ないけれど、みんなにも経験してほしいんですよ。一つの大会をおこなうのがどれほど大変なのか。もちろん僕だってゼロから作っているわけじゃないけど、ありがたみというんですかね、俺たちがリングに上がることでどれほどの人たちが動いているかがわかると思うんです。だから、春から夏にかけては田村、山村、T-Hawkってやったけど秋の陣は誰がやるのか。そこに向けてもつなげていきたい。

——そしてそのあとには、7月1日にSGC HALL有明初進出が待っています。

T-Hawk GLEATって面白いですよ。ぶっこみ精神っていうか。鈴木(裕之)社長と昼飯いくと、気合入っているんですよ。正直、たまにこの野郎!って思うこともあるんですけど、ちゃんと受け止めてくれるんですよ。気持ちで殴り合えるんですよ。だから「これにノリたい」って思える。7月1日につなぐためにもトーナメントで優勝して、凱旋興行もいいモノにしないとね。

春の頂上決戦、開幕

敬意と報復

2026 G-CLASS

FIRST ROUND 5.13 新宿FACE

SEMI FINAL 5.20 新宿FACE

FINAL 6.4 新宿FACE

エル・リングマン

山村武寛

石田凱士

KAZMA SAKAMOTO

T-Hawk

田村ハヤト

河上隆一

プラスチックJUN

G-CLASS CHAMPION

G-CLASS 2026

■開幕戦 5.13(WED)新宿FACE ■準決勝 5.20(WED)新宿FACE ■決勝戦 6.4(THU)新宿FACE

■SRS席 ¥10,000 ■カウンター席 ¥10,000 ■リングサイド席 ¥6,500 ■指定席A ¥5,500 ■指定席B ¥4,500
※小学生以上有料 小学生未満は席が必要な場合は有料 ※当日¥500アップ
※入場時に別途ワンドリンク代¥600が必要になります。※SRS=スペシャルリングサイドは各方向1列目

お問合せ リデットエンターテインメント株式会社
エンターテインメント事業部 03-5219-7717 <https://ent.lidet.co.jp/gleat/>

O-テレ e+ イープラス ぴあ GLEAT プロレス 検索